

ば、よねをとりかけておちられぬか、る事おほくありぬ、かちとり又鯛もてきたり、よねさけまばまばくる、かちとりけしきあしからず、

〔宇治拾遺物語 十四〕これもいまはむかし、つくしに大夫さだまげと申物ありけり、○中唐人すべ

きやうもなく、さだまげとむかひたる船頭がもとにきて、その事共なくさへづりければ、○下

〔高倉院嚴島御幸記〕からの御舟より、つゞみを三たびうつもろくの舟ども、はじめてこのころに湊をいづいではて、ぞ一の御舟はいださる、舟子かんどりなど、心ことにさうぞきたり、は

じこがしの藍すりに、きなるきぬども重ねて、廿人きたり、なきたる朝の海に、舟人のゑいやごゑめづらしくぞきこゆる、

〔源平盛衰記 四十二〕義經解纜四國渡附資盛清經頭可上京都由事

十六日○元曆二年正月○中略判官○義經ハ、風既ニ直レリ、急舟共出セト宣フ、水手楫取等申ケルハ、是程ノ大

風ニハ、争出シ候ベキ、風少弱候テコソト申、

〔増鏡煙のすまゝ〕寶治二年十月廿日ごろ、もみぢ御らんじがてら、うぢに御幸し給ふ、○中うぢ

川のひがしのきしに、御舟まうけられたれば、御車よりたてまつりうつるほど、夕つかたになりぬ、御舟さし色々のかりあをにて、八人づゝさまゝなり、

〔太平記 二〕長崎新左衛門尉意見事附阿新殿事

船人、○中手々ニ船ヲ漕モドス、汀近ク成ケレバ、船頭船ヨリ飛下テ、兒○日野ヲ肩ニノセ、○下

〔太平記 二十三〕大館左馬助討死事附篠塚勇力事

篠塚、○中其夜ノ夜半計ニ、今張浦ニゾ著タリケル、自此舟ニ乗テ、隱岐島へ落バヤト志シ、船ヤアルト見ルニ、敵ノ乗棄テ、水主計殘レル船數タアリ、是コソ我物ヨト悦テ、冑著ナガラ浪ノ上五町

計ヲ游ギテ、アル船ニ岸破ト飛乗ル、水主梶取驚テ、是ハ抑何者ゾト答メケレバ、○下

計ヲ游ギテ、アル船ニ岸破ト飛乗ル、水主梶取驚テ、是ハ抑何者ゾト答メケレバ、○下

計ヲ游ギテ、アル船ニ岸破ト飛乗ル、水主梶取驚テ、是ハ抑何者ゾト答メケレバ、○下